

## 逍遙点描

—絵と文・中嶋嶺雄—



### 忘れていた穂高のスケッチ

近頃は、道路もすっかりよくなったとはいえ、上高地へ通ずる釜トンネルは、今も昔と変わりなく、岩壁をくりぬいたままの急勾配だ。その釜トンネルを抜けると焼岳山麓の荒削りの山腹が梓川の曲がりくねって大きく広がった川原に突き出していて、またたくまに、あの懐かしい上高地の景観が飛びこんでくる。中学生のとき、一人で初めて上高地にスケッチに来て以来、幾度足を運んだことか。そのときもたしか初秋で、薄（すすき）の穂がそよぐ中にイーゼルを立てて絵を描いていたら、信濃毎日新聞のカメラマンがその光景を写してくれて、「上高地に秋の訪れ」といったタイトルで紙面に載ったことがあった。

上高地といえば、大正池に映る穂高連峰や河童橋からの焼岳といった光景が一般的だが、なんといっても梓川からの穂高の嶺々は圧巻であり、何度見ても様々な感動を誘ってくれる。やはり、日本ではもっとも素晴らしいダイナミックな風景だとつくづく思う。

この絵は、「1957. 10. 19 P. M. 3. 00」となっているから大学2年生のときの秋の習作である。先日物置の中から“発見”するまですっかり忘れていたものだが、私自身も気に入っているスケッチの一枚である。  
(東京外国語大学教授)

ASIA MONTHLY

東亞

1990

10

No. 280

見てきたベトナムの現状と課題

—「統一」された分断国家の現実—

宇佐美 滋

カンボジア問題の現状と今後の見通し

池田 維

中国の動向

アジア大会以後をにらむ政局

小島 朋之



KAZANKAI